



Newsletter No. 030

Vita brevis, ars longa.

特進部 三保谷 遼 (国語科)

10月になりました。入学・進級から半年が経過したことになります。半年前の自分と今の自分を比べてみましょう。端的に言えば、自分自身にどのような学びや成長があったでしょうか。他方に、進級・卒業まで残り半年を切っていることも指摘できます。あと半年、どのような学びを積み重ねて、半年後の自分をどのように成長させたいでしょうか。そして、そのために必要な手だては何でしょうか。この問いかけに対する答えを考えるためのキーワードをラテン語でいくつか提供したいと思います。



Carpe diem. 「カルペ・デイエム」と読みます。直訳すると「今日という日の花を摘め」になりますが、つまり「日々を大切に」とか「今を生きろ」という意味です。注意したいのは、ただ気持ちのありようを示唆しているだけではなく、主体的な行動を促しているということです。みなさんは「今日という日の花」を自分の手で摘んでいるでしょうか。ボーッと眺めているだけで夜を迎えていることはないでしょうか。あるいは、せっかく咲いている「今日という日の花」を視界の外側に追いやっていることはないでしょうか。ちなみに英語ではSeize the day.といいます。

Vivere est cogitare. じつは未来考動塾のロゴにも載せられている言葉ですが、「ウィーウェレ・エスト・コーギターレ」と読みます。「生きることは考えること」。Carpe diem とかけあわせてみると、「今日という日の花」を摘むという行動が指し示しているのは、絶え間ない思考、あるいは切れ目のない学びの実践であると理解することができるでしょう。まさに〈考動〉です。

Animo imperabit sapiens, stultus serviet. 少し長い言葉ですが、「アニモー・インペラービト・サピエーンズ・ストゥルトゥス・セルウィエト」と読みます。意味としては「賢者は心を支配し、愚者は心に隷属する」です。厳しい言い方をすると、もしも自分の感情や本能によって日々の行動が振りまわされているのだとすれば、それはあなたが「愚者」であるということの証左なのです。いいかえれば、不断に〈考動〉を心がけることによってのみ、人は「賢者」になれるということです。

冒頭の問いかけに戻ります。「今日という日の花」を摘みながら〈考動〉を展開して「賢者」を志す。こうした観点から半年前の自分と今の自分をとらえかえし、そして半年後の自分の姿を編みだしてみましよう。令和3年3月のみなさんが、さらに一回り大きく成長した姿を見せてくれることに大きな期待をこめて攔筆します。

特集：授業実践報告—しなやかな知性と豊かな感性のために

「オンライン英会話」授業の試み

2学期冒頭の8月25日（火）、2年特進クラスのコミュニケーション英語Ⅱの授業では、試験的な試みとしてタブレット端末を用いた「オンライン英会話」を実施しました。

今年度より正式に導入された生徒用iPad端末を用い、フィリピン・セブ島の英会話講師とインターネットで結んで各生徒がマンツーマンの英会話を25分間にわたり実践しました。今回はConversation Questionsという教材を用い、趣味や日常生活について

記された20項目程度の質問文を手元置いて、それをきっかけに講師とのざっくばらんな会話を展開しました。

生徒の皆さんの反応は概ね良好で、アンケートの結果によると、またやってみようという生徒が多数でした。また、普段勉強していることがなかなか口について出でこないということや、語彙力が足りないために英語が出てこないという感想を述べる生徒がいました。今回の試みが、「もっと話せるようになるために）もっと英語の勉強をしたい」というモチベーションにつながることを期待したいと思います。



何はともあれ、話すべき内容と、その内容を言葉として実現するための技術がうまく組み合わせることが肝要で、それこそが語学の力と言えましょう。時代を跋扈する浅薄な「コミュニケーション中心主義」の中で本当のコミュニケーションに必要なものが何なのかということをおぼきっかけにしてもらいたいです。（山田優）

「実感する」数学を目指して

数学の学習において「実感を伴った理解」というのはとても重要です。例えば当たり前のように計算できる $1 + 1$ という問題も、「一つのリンゴに一つのリンゴを加えるとリンゴが二つになる」とい



う素朴な「実感」があるから、確固たる数学的事実として認識できるのです（ちなみに大学での数学では、そのような「直感」を捨てなければなりません）。

さてそういう意味で、高校数学においても数学的事実を「実感する」という体験は重要です。現在1年特進クラス「数学Ⅰ」の授業では「三角比」を学習しています。

この単元は中学に習った「図形」を発展させていくもの

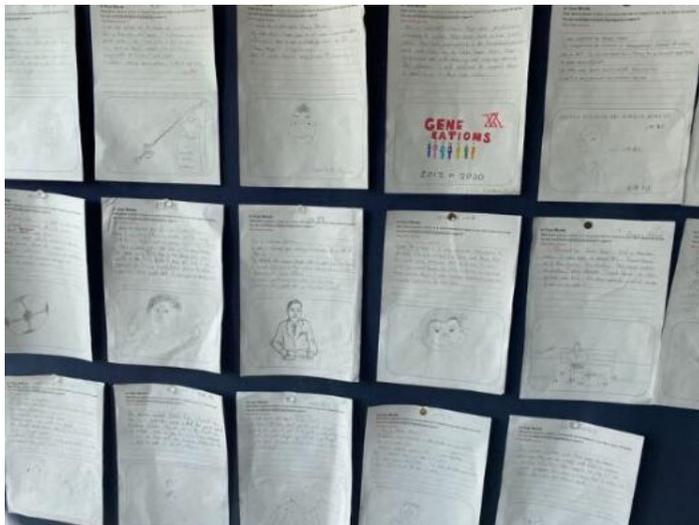
です。そこで先日、GeoGebraという数学ソフトを用いて「相似な三角形において、対応する辺の長さの比は等しい」という数学的事実を「再実感する」授業を行いました（写真はそのときの様子）。ちなみに近口中に「三角比を用いて本校校舎の高さを測る」授業を行う予定です。

また1・2年特進クラスにおける「2次関数」や「微分法」といった単元では、「動くグラフ」を考察する場合があります。生徒にとってこの様子を頭に思い描くのは、慣れないうちは難しいです。そこで問題を解く前に、電子黒板でグラフのアニメーションを見てもらうことにしています。一度動くグラフの様子が分かれば、そのイメージをもって生徒は問題を解くことができます。

本校数学科が大切にしていることは、問題が正しく解けることも無論大事ですが、数学的活動を通して「数学的実感」を得てもらうことも大切にしています。だからこそ数学的事実の「イメージ」や「実感」というものを生徒に得てもらうために、iPad や電子黒板を活用して授業を行っています。（細谷大輔）



Practice makes perfect!



科学進歩のおかげで世界がぐっと狭くなり、人が活躍できる場はどんどん広がってきています。「世界に通用する人」になるために、英語が「話せる」だけでは今はだめで、英語で自分の考えを「表現する」ことが求められます。大学入試でも記述式の問題や、英作文の比重が大きくなってきているのも、情報社会の時代に合わせたことでしょう。1年生のコミュ英Ⅰの授業では、生徒たちに自由英作文に積極的に取り組

んでもらっています。1回目のテーマは「50年後の世界」。50年後に世界はどのように変わっているかを想像してもらいました。前回は「自分の人生を変えた映画・本・人」です。過去を振り返って、自分に影響を与えた人や物について教えてもらいました。日本語で書くのも難しいテーマについて、英語で書くのは至難の業かもしれませんが、習うより慣れよです。日本語でもそうですが、作文は何度も書かないと上達しません。辞書を引きながら、納得するまで書き直し、必ず添削してもらおうのが英語の達人になる一番の近道かもしれません。(福岡麗子)

キョウソウ社会を生きるために

キョウソウ社会。皆さんの頭の中ではどんな漢字を当てたでしょうか。競争？狂騒？強壯？

VUCA時代 (Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性)の頭文字)というキーワードが盛んに喧伝されている今日、私たちに求められているのは競争でも狂騒でも強壯でもなく、共創です。そういう意味で、ひとりひとりが知を深め、その知を共有し、つないでいく経験は、共創社会を生きるうえで重要な意味を持っていると思います。こうした観点から、国語科では1・2年生それぞれの現代文の授業で、探究的な協働学習を展開しました。これは教材となる評論・小説などのテキストについて、グループごとの問題意識に基づいた調査・考察を行い、その成果をポスターやプレゼンテーションでまとめるというものです。以下に授業の共同担当者と実際に授業を受けた生徒たちの声を紹介します。(三保谷遼)



答えなき問い



多くの問題というものは、それぞれに対して「一つ」答えが存在しています(別解が存在することもあります)。特に受験はその「正解」を見出すために日々勉強をしていくことになります。しかし、世の中には「答えなき問い」というものも存在します。答えが示されていないがゆえに、その「最適解」を求め、考えなければならないのです。

この営みには学力の3要素の要ともいえるべき「思考力」「判断力」「表現力」が不可欠です。1

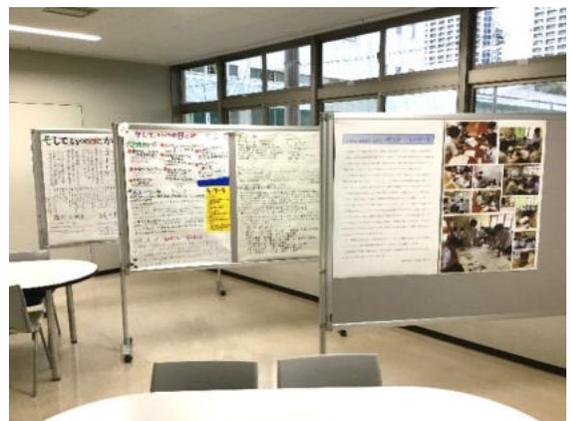
年特進では国語総合（現代文）の授業において、高橋源一郎「そして、いつの口にか」の本文を用いて、自分たちの読みを展開かつポスター形式で表現しました。最初の手掛かりは本文「のみ」。模範解答が示されていない分、自分たちで情報の取捨選択を行わなければいけません。最初は慣れない作業に戸惑っていた生徒たちでしたが、徐々にiPadも使いこなし、本質へと迫る調査の入り口まで到着しました。ポスターにも努力の跡がよく見えます。

2年特進では、同じく高橋源一郎「ぼくらの民主主義なんだぜ」から派生し、アメリカ、ドイツ、フランス、フィンランド、日本の国々の選挙制度について調査しました。1年生の取り組みに対して、内容が限定されている分簡単に感じられるかもしれませんが、しかし、専門用語やグラフからの分析もあるため、正確な情報を過不足なくまとめていくことは容易ではありません。お互いに情報をやり取りしながら、立派なプレゼンテーションにまとめあげることに成功しました。

これからの時代、先に述べたような「答えなき問い」に出会う機会がどんどん増えていくことでしょう。特進の生徒たちが、このような難題を自らの手で切り開くための実力を養ってくれることを願ってやみません。（中村 一智）

協働のために

私は、このグループワークの授業で、役割分担の大切さを学んだ。この役割分担は班の誰にも負担がかからないように先まで考えて分担する必要がある。もし負担を一部にかけると、手があいてしまう人とずっと作業をしなくてはならない人が出てしまうからだ。実際役割分担が甘かった班は、作業が遅れて、出来栄がイマイチになってしまっていた。このことから、集団で行動するときは綿密な分担をすることが重要であると考えた。（1年2組 松山駿介）



リーダーシップが次の課題

私は「トカトントン」の授業で、個人で考える部分では自分の考えをまとめるのに苦戦したが、何とかまとめることができた。しかし、この授業で悔しい思いをすることになった。レポート作成でそれぞれ分担する部分を曖昧にしていたこと、担当部分の原稿の締め切りを設定しなかったことから完成期口までに間に合わなかったのだ。私は指揮を執ることが苦手だが、それでも必要な時は自分で仕切ってグループをまとめていくことが、今後の自分にとって重要なことだと感じた。（2年1組 亀井健司）

未来への前進

私達は今回のプレゼンテーションを通じて、共有すべき意味のある時間というものがあることが確かに流れていたと私は感じた。

日本人は政治に関心がない。若者ならなおさらだろう。そもそもなぜ我々は政治に関心がなく、語りたがらないのだろうか。これはあくまで私個人の見解であるが、大きく分けて二つあるのではないだろうか。一つ目は、日本は社会の安定度が諸外国に比べて高いために、政治のことをわざわざ話題にしないで済んでいるからだ。例えばアメリカ合衆国では、人種間・業種間・地域間・階級間などの格差が大きく、社会の安定度が低いため、政治について多く語られるのではないだろうか。二つ目に、日本の社会が政治の話を抑制する空気を漂わせ、政治家の態度がそれを助長しているからだ。特に学校の教師はリスク回避の意識が強く、踏み込んだ政治の話を避ける傾向にある。社会についても学ぶ場であるべきなのに、生徒たちは理由がよく分からないままに、なんとなく政治の話はよくないと思ってしまうのではないか。どこか浮世離れした政治家の行動や発言が、私たちの生きる社会とは別物だと思わせるのも問題なのかもしれない。

超高齢社会でもある日本に明るい未来はあるだろうか。このままでは、日本は緩やかに滅んでしまうのではないかと私は考えているが、気が早いのもかもしれない。しかし、私たちが死んだ後もこの国はあるだろうが、次の世代に良い国を残すことができるだろうか。先人や国のために命を捧げていった英霊たちが守り抜いた日本を途絶えさせてしまうのではないか。それでは彼らの命は無意味であったのか。いや違う。彼らに意味を与えるのは生者である我々であり、そしてまた次の生者に意味を託す。こうして歴史は紡がれてきたのだ。

だからこそ今回のような探究授業は大変有意義なものであったと思う。日本の政治を改めて見つめ直し、各国の政治にも目を向けた。これらについて考えたことには大いに意味がある。政治について調べるといえることは、政治に関心を持つというスタートラインに立つことであり、日本の未来を



考えられるということだ。今回の学習が日本の未来をより良くする為の大きな前進であることを願う。若者なくして日本は成り立たない。

長々と最後まで読んでくださった皆様、有難うございました。拙い文章でしたが、何か印象に残ったものがあるならば嬉しく思います。(2年2組 谷下盛)

未来考動塾から

新宿まちづくりコンペティション2020 (1学年)

1年生は恒例の「新宿まちづくりコンペティション」に挑戦しています。これまでは模擬新宿区長選挙に向けて自分（たち）が新宿区長候補として訴えたい政策を協働探究し、政見放送としてその政策をプレゼンテーションするという内容を展開してきましたが、今年度は新たにSDGs（Sustainable Development Goals 国連の提唱する「持続可能な開発目標」のこと）を政策のなかに盛り込むことを試んでいます。

9月末までに、SDGsの達成という観点から新宿区の現状を分析し、17のゴールのなかから自分たちが扱いたいテーマを考えるとところまで進んできました。10月7日の授業

では個々の興味・関心に基づいて「政策顧問団」を結成しました。今後はそれぞれのゴールやターゲットの実現に向けて、エビデンスにもとづいて新宿区の現状をより正確に分析し、内閣府「SDGs未来都市及び自治体SDGsモデル事業」を参考にしつつ、SDGsと関連づけられた魅力的な政策の提言に向けて協働探究を進めていきます。また、一般企業やNGOとコラボレーションし、SDGsへの理解を深める機会も提供していく予定です。（三保谷遼）

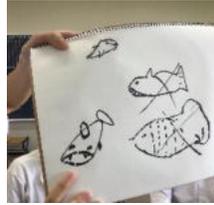


〈沖縄学〉への挑戦 (2学年)

2年生は修学旅行で沖縄に行きます。カヌーを漕いだり、沖縄の自然に触れたり、楽しい旅行にすることはもちろん大切ですが、「修学旅行」という名が示すように、知識の面でも楽しみや発見をしてもらいたいです。

日本国内至る所にある石碑。その石碑について知識がなければ、ただ素通りしてしまいますが、知識があればそこから過去のことについて思いをはせることができます。沖縄には至る所に戦争の傷痕や、文化・歴史の跡が残っています。そのようなものを見つける目を養うため、歴史を知るために沖縄について知る〈沖縄学〉に挑戦しています。

生徒は、戦前、戦中、戦後それぞれの時代について、探究活動を行っています。「沖縄の民家はなぜあのような形なのか」、「グスクと城の違いは何か」など、戦前の時代では文化をメインにした探究活動をしています。自分で疑問に思ったことについてレポートを作成することで、身の回りのものから学べる目を養ってほしいです。(皆川教史)



知の三叉路 (3 学年)



第三学年の未来考動塾では、「知の三叉路」と題して、論文の作成を行っています。具体的には、大学入試の小論文課題の中から興味関心を持つものを選び、その調査・研究を行う中で、特に関心を持つようになった事柄について論文をまとめることを目標としています。そして、論文としてまとめる中で、新たな知識の構築を目指しています。探究活動のきっかけとして提示した小論文課題は文理様々で、文系の生徒が理系の課題を、理系の生徒が文系の課題を、それぞれ選ぶこともあり、生徒が抱く多様な好奇心が垣間見えます。現在は論文の作成段階に入っており、最終的には論文集のかたちでまとめたいと考えています。以下に小論文課題の例や、論文テーマの例を紹介します。(佐藤貴志・山口裕太郎)



小論文課題の例

- 社会的現象のモデル化(東京大学 2013)
- 社会科学の分析手法を用いた格差の考察(慶應義塾大学 2014)
- 観光立国のために必要なこと(早稲田大学 2018)
- 生物の身体の大きさ(京都大学 2018)

文系の論文テーマ例

- 所謂「転売屋」によって行われる転売行為の問題点について
- 歴史的な文章とその客観性について
- 和歌における「雨」の使われ方
- インターネットはモラルある公共空間になれるのか

理系の論文テーマ例

- 回路の仕組みと電圧の関係 (実験を通して)
- 二十日大根における味と土壌の関係性
- コンクリートの有効性(構造において木との違い)
- オゾン層の破壊と人体との関係性

編集後記

過日、職員室でゴハンロンボウなる言葉があるという話題が持ち上がったのだが、その際にとある先生が「字を調べる」といってインターネットで検索をした。正解は「ご飯論法」なのだが、どうもその先生は「ゴハン」を難しい熟語だと感じたらしい。音で聞いただけではわからないことも、ちょっと調べてみればすぐにわかる。そういう便利な世の中なのだ。生徒諸君、世の中には君たちの知らないことがたくさんある。知るという行為のフットワークを軽くしてみてもはどうだろうか。(編集子)